

顕彰状

ミヒャエル・ホッフ氏は、1961年、ドイツのジンゲンに生まれ、ハイデルベルク大学にて生物学を学んだ。1992年、ミュンヘン大学より博士号（生物学）を授与された後、マックス・プランク生物物理化学研究所分子発生生物学部において研究に従事し、1994年、同部のグループリーダーに就任した。1996年、ブラウンシュヴァイク工科大学において発生遺伝学・細胞生物学の教育資格を取得、同年、ドイツ研究財団の Gerhard-Hess-Young Investigator Award を受賞した。1999年、ホッフ氏はボン大学の分子発生生物学の正教授および主任に就任した後、2006年、ボン大学の生命医科学研究所（LIMES）を創立し、所長に就任すると同時に、同大学の数学・自然科学部の分子生物医学科を創立、その学科長に就任、2015年、ボン大学学長に選出され、現在に至っている。

ホッフ氏は、主に代謝や細胞、臓器などの生理機能をコントロールする重要な調節遺伝子と遺伝ネットワークの同定を行い、それらの特性を明らかにすることを目的として研究を行っており、特に、代謝—先天性免疫—腸内マイクロバイオームに着目し、スフィンゴ脂質代謝と体脂肪の制御について調べるとともに、ペルオキシソーム、リソソームの生合成、および代謝異常について研究を行っている。ホッフ氏は、ショウジョウバエ、マウス、ゼブラフィッシュなどのモデル動物を使って研究を行い、*steppke* や *schlank* などのインスリンシグナルや脂質代謝を制御する新たな遺伝子を同定し、絶食や飢餓によりエネルギーレベルが下がると、先天性免疫システムの抗微生物ペプチドを直接活性化させることを示すことにより、代謝と先天性免疫を相互に制御する基本的なメカニズムを新たに発見した。

ホッフ氏は、ドイツにおいて多くの研究ユニット・共同研究センターの責任者・運営委員を務めるとともに、ドイツ学術交流支援委員会、ドイツ—イスラエル研究促進協会ミネルバ・フェローシップ委員会、およびドイツ国立功労財団博士研究員選考委員会などの数々の科学技術委員会の委員を務める。

2006年以降、ホッフ氏は早稲田大学先端科学・健康医療融合研究機構（ASMeW）および東京女子医科大学・早稲田大学連携先端生命医科学研究教育施設（TWIns）との学術協力および人材交流の促進に大きく寄与してきた。これまで教職員、学生（博士大学院生、修士大学院生、学部生）を合わせて100名以上が交換プログラムに参加し、この約10年間に20回余りのジョイントシンポジウムやワークショップを開催し、毎夏、15名余りの学生を対象として研究研修を受け入れ、本学との間の学術教育交流に多大な貢献をしてきた。2016年には、ボン大学の数学・自然科学部と早稲田大学先進理工学研究科の間で「Joint Supervision Program」に関する協定を締結し、ホッフ氏自らが共同研究指導を担い、「ボン大学—早稲田大学 Joint Supervision Program」の認定第一号となる博士学位取得者を世に送り出した。これまで科学技術の発展および人材育成への本学の取組みに継続して協力し、両大学の友好関係および信頼関係の増進に大きく寄与してきたことに鑑み、ホッフ氏は本学名誉博士の称号を贈呈するにふさわしい。

よってここに早稲田大学は、ミヒャエル・ホッフ氏に名誉博士（Honorary Doctor of Science）の学位を贈ることとした。

学問の府に栄えあれ！

大学が栄誉を与えんとする者を讃えよ！

(Vivat universitas scientiarum! Laudate quem universitas honorabit!)

2017年10月9日

早稲田大学